元学長・望月清司先生への追悼の辞

緑鳳学会最高顧問で、元専修大学長の望月清司先生が、2023（令和5）年2月1日にご逝去されました。享年93歳でした。2月13日に執り行われた先生との「お別れの会」においては、本学会から、「専修大学緑鳳学会役員一同」として供花させていただき、緑鳳学会創立から今日までの本学会の歩みに温かい眼差しと励ましを与えくださった先生の熱き思いに、謹んで哀悼の意を表しました。

望月清司先生が本学会の発足に際して発揮された行動力は、会員の皆様方がご存じのように並々ならぬ迫力を感じさせるものでした。「『専修総合科学研究』創刊に寄せて」（1995年10月）において、先生は「本学のように歴史と伝統を有する大学は、研究者の養成という大学の基本目的を、自覚的に自ら担わなければならない。目的というより、それは存在意識といってよい。私学には、自己の大学の特色を受けつぐ後継者を内部で育てたいという欲求があることは否めないが、この研究者養成という役割は、文字どおり普遍的なものであって、自己の大学の存立のためではない。国公私立の別をはるかに超えるものである。（中略）本学から巣立って他大学の教壇に立つ研究者たちが、緑鳳学会に結集して、互いの研究成果に学びあい、情報を交換し、親睦を深めることになったことの意義は、たんに校友会活動の一環としてばかりでなく、本学の社会的声価を高める上でもはかり知れないほど大きい」と表明されていました。先生は、当初から本学会機関誌を学問研究の科学的諸分野を網羅した総合誌と位置づけ、『専修総合科学研究』との研究雑誌名を用意されていました。

「創刊に寄せて」の最後のところで、先生は、「このたびの学会誌の発刊は、ことに若い会員諸氏にとって、大きな自信と励ましになるであろうことを信じて疑わない。これを契機として、専修大学緑鳳学会がいっそうの質的飛躍を遂げ、その活動を通じてわが国の学界に新たな一石を投じることを期待するとともに、本学が今まで以上に研究者養成という大学の機能を発揮してゆく上で、またとない苗床の役割を果たしてゆくよう祈ってやまない」と結んでおられます。

それから32年を経て、今や会員数も約230名となり、機関誌もここに第31号を刊行するまでに至っております。果たして、先生の期待にどこまで応えられているのかは会員諸氏が虚心坦懐に振り返ってみることとして、先生のメサージュの重みを改めて噛み締めてみる機会にしたいと思います。

これまでの長きにわたる先生の学恩に感謝しつつ、心より先生のご冥福をお祈りいたします。

緑鳳学会会長　近江吉明